

夏の夜空に美しく花開く

## 花火大会

盛夏に涼を呼ぶ行事としておなじみの花火大会の歴史を紹介します。

辺りを揺るがす大音響とともに天高く舞い、夏の夜空を彩る大輪の花・・・例年七月中旬に豊平川河畔で繰り上げられる花火の競演は、夏の風物詩として市民に親しまれています。

札幌で花火大会が初めて開かれた年代については諸説があり、その一つが、大正十年（一九二二年）ころ、札幌市交通局の前身である「札幌電気軌道株式会社」がPRのために始めたというもの。市電の生みの親、助川貞二郎すけがわ じゅうじろうが発案したとされ、開催期間は十日間にも及び、豊平橋のアーチを利用した現在のイルミネーションを思わせる仕掛け花火も披露されたといわれています。

一方、明治四十年（一九〇七年）ころの日露戦争勝利祝賀会の花火大会が元祖であるとも語り継がれています。この時は、花火大会と花火の競技会を兼

ねたもので、全国の有名な花火師が集まって技を競い合ったといえます。現在の納涼を目的とした花火大会とは少し趣が違ったようです。

その後、花火大会は次第に盛大になり、大正七年（一九一八年）の開道五十年記念博覧会の際には、全国から五十人もの業者が集まったのをはじめ、十二年（一九二三年）ころには、道内の業者による競技会も行われたそうです。

当時の花火大会について報じた「北海タイムス」（現・北海道新聞）の記事には、「五色朝顔棚」、「藤棚乱玉」、「牡丹獅子」といった、あでやかな名前の仕掛け花火が打ち上げられたとあり、風雅な花火見物の様子が伝わってきます。

（平成十三年七月号・第七十七回）



壮大な光の芸術に歓声があがる